カトリック教報

カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852－8113
長崎市上野町10－34
カトリックセンター内
TEL 095－843－3869
FAX 095－843－3417
振替口座 01880－5－2699
発行人
山田良秋
印刷所
株式会社 藤木博英社

11月浦上教会で

司教座聖堂献堂記念日と宗教改革500年記念

大司教 ヨセフ 髙見 三明

会場：浦上教会

司教座聖堂献堂記念ミサ
11月5日（日）18時30分
宗教改革500年記念
シンポジウムと合同礼拝
11月23日（木）10時～15時

司教座聖堂献堂記念日

1．教区司教の重要性

全世界に任命された司教たちは、相互にまたローマの司教（教皇）と、一致と愛と平和のきずなをもって交わりながら、各自に委ねられている教区において「一致の目に見える根源であり、基礎」です（『教会憲章』22と23）。そのため、「すべての信者は、司教を中心とした教区の典礼生活、とくに司教座聖堂における典礼生活をもっとも大切にしなければなりません。司教が自分の司祭団と奉仕者に囲まれて司式し、一つの祭壇のもとで、一つの祈りをもってささげられる同じ典礼祭儀、とくに同じ感謝の祭儀において、神の聖なる民全体が十全かつ行動的に参加するとき、教会が際立った形で表されるのです。このことをすべての人が確信しなければなりません」（『典礼憲章』41）

2．司教座聖堂の重要性

教会において聖なる場所は、聖堂と墓地です。すべての教会堂は奉献あるいは祝福されることによって神に対する崇敬の場所となります（『カトリック新教会法典』第1217条(2)。『ローマ・ミサ典礼書の総則（暫定版）』290）。とくに、司教座聖堂と小教区聖堂は荘厳な式によって奉献されなければなりません（『カトリック新教会法典』第1217条）。信者は自分の教区の司教座聖堂と所属の教会堂を大切にし、霊による教会のしるしとするように義務づけられています（『ローマ・ミサ典礼書の総則』（暫定版）290）。とくに、カテドラルすなわち司教座聖堂は、司教座（カテドラ）を擁するという品位のゆえに別格とされます。司教座は、一致と秩序と権能およびペトロと結びついた真正な教導権の要なのです。さらに、「わたしたちは生ける神の神殿なのです」（二コリ6・16）と聖パウロが言っているように、各自の内面に建てられる霊的神殿を恵みの輝きのうちに現わしています。

従って、教区の暦には、保護者の祭典と司教座聖堂献堂の祭典などを入れることになっています（『典礼暦年に関する一般原則および一般ローマ暦』52、イ）。

以上のような理由で、毎年、司教座聖堂の献堂記念日にミサをささげて神に感謝し、教区の一致とローマ教皇との一致を強めるために祈ることは有意義なことです。

【注】「司教座聖堂」「司教座教会」という呼び方について

1．Ecclesiaは普通、「教会」と訳され、一般に2つの意味で用いられている。
(1)キリストによって設立され、キリストを頭とするキリスト信者の共同体（本来の意味）
(2)この共同体が集まって典礼に参加するための聖なる建造物

2．しかし、「教会」は基本的に、上記1の(1)の意味で使用されることが望ましい。

「聖堂」は、このキリスト信者の共同体（教会）と区別して、聖なる建造物を指すのに用いられてきた。従って、司教座の置かれている建造物は「司教座聖堂」と呼ばれる。「司教座教会」と表記される場合もあるが、ここでは『カトリック新教会法典』と『第二バチカン公会議公文書 改訂公式訳』の訳に倣い、「司教座聖堂」と表記する。

宗教改革500年記念の意義

主イエス・キリストは、12使徒を土台として「唯一の教会」を設立されました。この教会は、紀元7世紀までに正統信仰の本質的内容を確定し、さらに発展していきました。ところが、1054年に東方と西方に大分裂をし、1517年10月31日、聖アウグスチノ修道会司祭ルターが教会の「改革」のためにヴィッテンベルク城教会の扉に「（免償符に関する）95箇条の提題」を貼り出したことから今度は西方教会に分裂が起こりました。その後1555年までの複合的な歴史的出来事が宗教改革と呼ばれています。さらに1534年には英国国教会（聖公会）が分離し、以後教会は多くの教派に分かれていきました。

しかし、このような分裂は、明らかにキリストの意志に反し、世の人をつまずかせ、福音宣教の妨げとなっています。その意味で、宗教改革500年目の今年11月23日に日本福音ルーテル教会と日本カトリック司教協議会の共同主催により浦上教会で合同礼拝、対話フォーラム・シンポジウムが行われることは意義深いことです。

教会は、第2バチカン公会議で教会や啓示に関する憲章、『エキュメニズムに関する教令』を公布し、19世紀以来の教会一致運動を積極的に推進しました。とくにルーテル教会とカトリック教会は、1999年に『義認の教理に関する共同宣言』（教文館、2004年）を、2013年には宗教改革500年に向けて歴史の検証と未来に向かう道筋を提言した共同文書『争いから交わりへ』（教文館、2015年）を発表しました。昨年10月31日にはカトリック教会とルーテル教会の共同主催により、フランシスコ教皇と世界ルーテル連盟ユナン議長が、同連盟発祥の地スウェーデンのルンド大聖堂で合同礼拝を行いました。

かつて激しく非難し合い対立してきた両教会が、500年の時を経て、いまや過去の記憶を浄め癒やすと同時に、キリストの福音の真理に合致した一致を回復したいと望んでいます。両教会は、キリストの一つの体に属していることを認め、信仰の多くのものを共有していることを喜ぶと同時に、人物や出来事に失敗や過ちがあったことを互いに認め、赦しを願う必要があります。そして常に一致の視点から再出発し、各自自らを変容させ、福音の力を再発見し、世に対して神の憐れみを証ししながら、目に見える一致を目指して努力しなければなりません。キリシタンの迫害と被爆の地浦上で行われる記念行事が、両教会にとって和解と平和の実現に向かって踏み出す第一歩を象徴するものとなれば幸いです。

これからの皆さんへ

教区青少年委員長　工藤 秀晃

1984年、「あがないの特別聖年」の閉会ミサで、聖ヨハネ・パウロ2世教皇様は、青年たちにローマに集うように呼びかけ、その呼びかけに応えて翌年、各国から多くの青年たちが集い、青年の国際大会が行われました。その後、毎年「受難の主日（枝の主日）」が「世界青年の日（ワールドユースデー）」と定められ、聖書の一節からとられたテーマのもと、聖ヨハネ・パウロ2世、ベネディクト16世、フランシスコの3人の教皇様が今日にいたるまで全世界の青年に向けてメッセージを発信し続けておられます。ちなみに2017年のテーマは、「力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊い（ルカ1・49）」というマリア様の言葉です。

同じように、歴代の大司教様も年頭教書や復活教書、折々のミサにおける説教などを通して、長崎教区のすべての人にメッセージを発信し続けておられます。それは、青年とて例外ではありません。

ところが、「こんなにも情報網が発達している現代にあって、せっかくの教皇様のメッセージも、大司教様のメッセージも、多くの青年たちのもとまで届いていないのではないだろうか？」そんな思いが青少年委員会の中によぎりました。同時に、「青年たちの思いもまた、教皇様までとは言わなくとも、せめて大司教様や青年同士の間に伝わっているのだろうか？」という思いも浮かびました。

そこで、SNSでも、紙媒体でもなく、大司教様も青年も皆で同じ場所に集まって同じ時間を共有し、お互いの顔と顔とを突き合わせながら、普段から自分が思っていること・考えていること・知ってほしいこと・伝えたいこと等々を分かち合える場があればと思い、「長崎青年の日」を開催することになりました。

先に開催された「第1回髙見杯青年ソフトバレー大会」では、およそ40人の青年と11人の若手司祭が4チームに分かれ、スポーツを通じて交流することができましたが、今度はじっくりと対話することでコミュニケーションを図れたらと思っています。

今、小教区や地区で地道に青年会活動を行っている人も、活動したいけど仲間がいなくて躊躇している人も、「大司教様？青年活動？　エッ何？」と、？マークが浮かんでいる人も、とにかく誰でも、取りあえず軽い気持ちで来てみてください。そうすれば何かを見いだします。決して難しいことは何もありません。お待ちしております。

第1回長崎青年の日
これからの皆さんへ
11/3（金）～4（土）
長崎大司教館
※1日だけの参加も可
青年のためにお祈りください

ほしかげ

11月1日は我が教区の司教座聖堂である浦上教会の献堂記念日だ。典礼規則によると、司教座聖堂の献堂記念日は教区の祭日として、小教区の聖堂などはその共同体の祝日として祝うよう定められている（献堂式儀式書、緒言26）▲髙見大司教様は、今年から司教座聖堂の献堂記念日を祝うことにされた。11月5日（日）午後6時30分から大司教司式でミサがささげられる▲浦上教会は、顕著な価値を有する聖堂だ。被爆後、苦しい生活の最中、多くの人の努力と善意が結集して、1959年この聖堂は落成した。以来、ここは平和を願う象徴的な場となり、多くの人が集い、平和の大切さを学び、平和への祈りをささげている▲1962年、司教座聖堂となり、主な教区行事がこの聖堂で執り行われることとなった。とりわけ、司祭との出会いを待ち続け、大浦天主堂での信徒発見に至った信仰を継承してきた地での司祭叙階式には、感慨深いものがある▲1981年には、聖ヨハネ・パウロ2世教皇様が、この聖堂を訪れてくださった。この折に、浦上の信徒はじめ、全教区民で教皇様を迎えるため、内装、外装を新たにし、現在の姿となった▲11月1日、諸聖人の祭日のミサに合わせて、浦上教会の献堂も思い起こしていただきたい。近隣の信徒は、是非11月5日（日）午後6時30分のミサに参集していただきたいと願う。（窄）

連載企画（全5回）

150周年を記念する 浦上四番崩れ ― 第3回

純心聖母会　片岡千鶴子

三、浦上村総流配「旅」 ―コンタツをはり上げて祈りて行きました

1868年、明治の代になりました。長崎には澤宣嘉（のぶよし）が長崎裁判所総督として着任します。新政府は幕府の旧制度を改めるとしながらキリシタン禁制は踏襲します。

澤宣嘉は、浦上キリシタン問題を着任第一の仕事とし、信徒26人を呼び出して信仰を捨てよと厳命しました。信徒たちは聞き入れません。1カ月後には戸主180人を呼び出しました。「厳刑に処せられても苦しくありません」と応じないのみか、仙右衛門は「天地万物の御作者である天主にのみ救いがあります。信仰を捨てることはかないません」と面（おもて）をあげて弁じます。百姓の分際でお上の威光に逆らう態度は、澤宣嘉にとって許し難い行為でした。問答無用と「張本人たちは斬罪、残りは流罪にして、キリシタンを根こそぎにすべし」という処分案を新政府に差し出しました。

5月17日、御前会議が開かれ「教徒三千余人を名古屋以西十万石以上の諸藩に配分監禁し…懇々教諭を加えさせる」という「浦上村総流配」が決せられました。7月、仙右衛門ら114人が津和野、萩、福山に流され、翌年1月に戸主700人、続いて家族全員に出頭命令が出ました。「雪が沢山つみてありました。子どもを引き連れ、背にはこまい子を負いて西屋敷まで。行く道にはコンタツをはり上げて祈りて行きました」彼らは祈りながら「旅」に出たのです。

1月8日には史上未曾有の一村3384人の総流配が完了し、浦上は無人の村となりました。信徒たちは流配先の牢屋で説諭と厳しい拷問で棄教を迫られました。津和野では氷責めや三尺牢、萩では寒さらしの拷問が用いられています。特に飢えと渇きは、多くの改心者を出しました。本原のサダの覚書に「食べ物は赤米の粥一椀、梅干し一つ」「あまりに子どもがひもじか、水飲むと言うのを親共が聞きかねて改心するものが沢山ありました」とあります。改心者は1022人に上りました。

仙右衛門たちは心を痛めました。楠本正隆の巡察で取り扱いが緩やかになった時、密かに牢を抜け出た甚三郎が、「共に苦しんだ者、特に仙右衛門に代わってお願いします。飢餓の責め苦によってただ口さきだけで教えを捨てた人びとの罪を赦してください。何時か告白が出来る時まで償いをください」と願ったとビリオン神父が書き残しています。彼らは帰村後、土井の忠右衛門たちの働きで改心戻しをしています。一方、信徒たちが「旅」の苦難を忍んでいる間に、浦上キリシタン問題は岩倉使節団の条約改正に絡む国際外交問題となっていたのです。

コンタツ＝ロザリオとその祈りのこと。

（続く）

教区シノドス　これからどう進む ②

神のいつくしみを 共に生き、伝える

各評議会で小共同体づくりの取り組みを

小共同体推進室長　下窄英知

長崎教区が小共同体推進室を設けたのは2004年のことですので、すでに13年が経過したことになります。その間、資料作成や研修会実施に取り組んできましたが、いまだに理解が広がったとは言い難い状況にあります。私も、小共同体づくりにエネルギーを投入することは無駄ではないか、と思っていました。小教区の現場で必要だと思われていないのに、いいからやってみろ、と言われてもモチベーションは上がりません。それが今日まで続いてきたのです。

数年前、教区の組織を見直す会議の中で、私は「小共同体推進室を閉じてはどうか」と発言しました。同調する方も少なくなかったようですが、高見大司教様が「小共同体づくりは絶対にあきらめない。たとえ名目だけであったとしても、小共同体推進室は残す」と明言されました。その時私は、大司教様が絶対あきらめないことを、私があきらめてはならない、と思いました。

結局、大司教様の思いはその後の教区シノドス公式提言に反映され、『小共同体』づくりは、今後は教区・地区・小教区評議会を通して推進していく」（公式提言2・3）ことになりました。つまり、実施主体は各評議会ですので、教区評議会の下にある小共同体推進室は、そのお手伝いをさせていただく機関です。

小共同体は、長崎教区の伝統に沿って言えば、班集会、地区集会のことです。人間関係の希薄化や高齢世帯の孤立化が進む中で、一般社会においても、人と人とのつながりや地域の絆が見直されていますが、イエス様を囲んで集まることは、教会の核心的な教えです。神様と私とのつながり、私と人々とのつながりを体験的に学び、具体的に実践するのが小共同体の目指すところです。

小教区の神父様や評議員の皆さんが、班集会や地区集会の参加を呼びかけておられると思います。どうかのぞいてみてください。

引退司祭の今後

「トビア会」設立

長崎教区司祭の引退者が増えていく中にあって、昨年9月に「司祭の引退後の生活を考えるプロジェクトチーム」が設立された。高見大司教はこの会を旧約聖書の『トビト記』から、息子トビアの父親トビトへの思いやりにちなんで「トビア会」と名付けた。目的は引退された司祭が、聖職者としてふさわしい余生と最後を迎えることである。

現在、長崎教区司祭の引退者は15人（大司教館に5人、カトリックセンターや施設に3人、そして希望住居に7人）である。今後さらに増え続け、25年後にはピークを迎え、引退者がさらに増えていくことは確実である。現在、数人を除いてほとんどの引退司祭は自立しているものの、認知症も含めた介護の必要性も十分予想される。こうした状況の中で、必要に迫られても直ちに民間施設に入所できるわけではないことから、教区の施設の必要性に迫られている。今は既存の施設との関係、介護士の問題、運営資金など解決すべきさまざまな問題を抱えているが、実現のため3～5年後をめどに、高見大司教を責任者として、司教総代理、事務局、地区代表者などで会議を重ねている。

トビア会座長　山脇守

教会が教会であるために

中町教会献堂120周年によせて

9月3日（日）中町教会は献堂120周年の節目を祝うことができました。前回90周年の節目を刻んで30年経過しての慶事ということになります。普通50年とか100年という区切りで記念するのになぜこんな節目を？特に意図したわけではないのですが、結果的には大変意義深いものになったのではないかと思います。

私たちの信仰のそもそもの源泉はイエス・キリストの3日目のよみがえりにあり、いま三位一体の愛の渦巻きと抱擁の中で人類は日々を送っています。

〝キリスト道〟は3の倍数でその道標を示し、節目を刻んでいることになります。信徒発見150周年も3の倍数、今年2017年はパリ外国宣教会から日本人による宣教へといわば「宣教権」を交代した1927年からちょうど90年目になります。こうした時の位置付けとともに、折からの教区シノドスが指し示す宣教路線に触発されて、この120年の節目に、「宣教――教会が教会であるために」というテーマを掲げました。

「おおきくまとめたければ小さくまとめよ」

これは最近言われるようになった「小共同体方式による宣教」の合言葉です。いちにのさん、教会維持から宣教路線への飛躍を、これが中町教会の思いです。

（主任司祭　橋本勲）

新刊良書

★1945年のクリスマス　ながさきアンジェラスのかね

文＝中井俊已
絵＝おむらまりこ

1945年のクリスマスイブに、浦上天主堂の瓦礫の下から信徒によって掘り出されたアンジェラスの鐘が、クリスマスミサの寄せ鐘として街に鳴りわたった。家族や家・財産を失い、生きる望みも力もなくしていた人々が、この平和の鐘の音を耳にした喜びはいかばかりだったことか。その思いを永井隆博士の娘かやの目線で描く。戦争の恐ろしさを知らない子どもたちや大人に平和の大切さを伝える感動のクリスマス絵本である。

作者は、長崎教区に信徒として35年間在住した作家で、『永井隆　平和を祈り愛に生きた医師』の著作もある。ドン・ボスコ社、税別1000円。

ふどう園

▼島原・天草殉教福者記念ミサ　10月8日(日)13時、原城本丸跡。雨天・強風時は島原教会。問合先・島原教会 TEL 0957-62-2952

▼山内清海師連続講演会（第3回）「なぜ生きなければならないのか？」10月22日(日)14時30分～16時、長崎市立図書館多目的ホール。入場無料。ミカエル会主催。

▼公開聖書講座「旧約聖書の知恵と私たちの信仰」　10月29日(日)13時～16時、カトリックセンター。講師・山下敦師（大分教区）。参加費500円。申込先（10月22日〆切）・教区生涯養成委員会 FAX 095-841-7732

感謝

―香典返し―

長崎大司教区
●武本信代様（小ヶ倉）
故ヨゼフ武本直親様

長崎カトリック神学院
●武本信代様（小ヶ倉）
故ヨゼフ武本直親様
●小島伊佐男様（福江）
故セシリア小島エキ様

右の方々からご寄付・ご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

長崎教区家庭委員会からのお知らせ

2018年カレンダー「ともにあゆむ」10月2日（月）から販売します。

1冊800円（税込）。送料・振込手数料は別途かかります。各小教区で取りまとめの上お申し込み願います。カトリックセンターでも購入可。

【問い合わせ先】教区家庭委員会（辻）TEL 095-842-4450

講演会
「共に生きる学び ～家庭の中で宗教が異なるとき～」
10月22日（日）13時～15時　カトリックセンター
講師　葛嶋秀信師（黒崎教会主任司祭）
村上順子修道女（お告げのマリア修道会）
主催　長崎南地区家庭委員会

生活の違いなど具体的にQ&A式でお話されます。ぜひ、ご参加ください。『カトリック教会の諸宗教対話の手引き』をお持ちの方はご持参ください。当日会場でも販売します。

石碑
文字彫刻
墓地工事
リフォーム
墓地分譲
ながさきせきちょう
長崎石彫
ヨゼフ　岩永　博明
☎(095)862-2469
長崎市梁川町 6-17　岩永ビル

人と人の絆を大切に・ご葬儀のご相談は
メモリードホール・典礼会館・中央斎場
長崎・諫早・大村・佐世保
株式会社メモリード　メモリード葬祭　検索　事務局　ペトロ　田川慶司
0120-44-6666

タンスの中身は入れたまま
責任ある安全運送!!
（見積り無料・荷造り発送も致します）
貨物保険有り
・一般引越　・小荷物
・荒ゴミ捨て　・遠距離
・学生引越　・ピアノ運搬
24時間営業・年中無休
受付時間 7：00～22：00
水浦運送
シモン　水浦　幹雄
長崎市上野町12－3
TEL(095)(代)847－7151
844－1420

長崎カトリックセンター前　長崎市上野町1-5
TEL 095-845-6175
医療法人　平田クリニック
院長　ヨゼフ 平田哲也
内科・循環器科・入院可
通所リハビリテーションあり

信仰遺産を思い起こす

浦上四番崩れ150周年の年　十字架山殉教祭

9月10日（日）午後2時から、約180人が集まり、聖地「十字架山」において浦上教会助任司祭、下原和希神父様司式のもと「十字架山殉教祭」ミサが執り行われた。

「浦上四番崩れ」で流配された先で殉教した先祖の遺徳をしのぶとともに、流配先から戻って「償いと許しと信仰の自由に感謝して建立した十字架山」。浦上の先祖の信仰の源泉といえるこの十字架山で、2009年4月18日に、当時の主任司祭平野 勇神父様によって「十字架山追悼祈念ミサ」が行われ、十字架山が信仰を証しする復活の丘へとなることを祈願したのが、殉教祭の始まり。その後、十字架山建立の日「十字架称賛の祝日」9月14日に合わせて毎年行うようになってから9回となる。

説教で下原神父様は「信仰の遺産を思い起こす、キリストの愛を思い起こす、目に見えないものを思い起こすことは大切なこと。神は人間を愛するがために主を遣わされ、十字架の苦しみによって私たちを贖ってくださった。先祖も、主の十字架を信仰の原点とし、苦しみの中でも信仰を伝えてくれました。私たちはこの目に見えない信仰遺産を思い起こし、伝えるために祈りを捧げてまいりましょう」と話された。

ミサの終わりに主任司祭久志利津男神父様は「今年は浦上四番崩れ150周年、来年は流配150周年、6年後は流配より帰郷150周年。この聖地十字架山で祈ることは例年以上に意義があることです」と締めくくられた。

浦上教会広報委員会　深堀範人

殉教者の思いを胸に

大村殉教祭

9月3日（日）大村殉教祭（教区主催、同実行委員会運営）が、「殉教者の思いを胸に！」をメインテーマにシーハットおおむら・さくらホールなどで開催された。

今年は、大村の帯取でイエズス会マシャード神父とフランシスコ会ペトロ神父が殉教して400年の節目の年にあたることから、このことを基軸に殉教祭が進められた。午前中は約50人が参加して帯取殉教地でみことばの祭儀が行われ、午後、さくらホールでの記念ミサでは約550人が共に祈りをささげた。

殉教祭の準備に携わった男性信徒は、「この日は放虎原殉教地からほど近い所で見つかった不発弾の処理があったが、幸い、11時には問題なく処理は終わり、これも神の計らいと思いたい。また、今年は宣伝不足のためか、大村市内巡礼ガイドの申し込みがなかった。来年は殉教記念ミサだけでなく、市内巡礼にも多くの人が来ていただけるように努めたい」と語った。

殉教祭実行委員会では毎年、記念ミサの前に、希望に応じて大村市内巡礼の案内をしている。

沖縄平和学習から感じたこと

キム・ボム 助祭

本紙9月号掲載の「沖縄平和学習」の記事中、コメントを寄せていただいたキム助祭の感想を全文掲載し、紹介します。（広報委員会）

この世にいる人なら誰であろうが、平和はいいものであり、この世に必要なものであることくらいは分かっていると思う。でも大半の人々は理論的に、あるいは皮相的に平和について考えるかもしれない。ほとんどの人間は、物を失ってからそのものが自分にとってどれほど大切だったかを悟ることが多いと思う。直接戦争を経験し、戦争の悲惨さを目にした沖縄は、私たちに平和というものがどれほど大切なのかを、その経験をもって教えてくれる。長崎大司教区の平和学習（7月31日～8月3日実施）に参加して、平和について考えてみたことをこの機会をもって分かち合いたいと思う。

私たちは、戦争を直接経験したことがない。私の親も1950年の韓国戦争（6・25戦争とも呼ぶ）が終わってから生まれたため、直接戦争を経験はしなかったが、その戦争が残した悲惨さ、空虚さ、廃虚などを直接経験した。食べ物がなくて飢餓で亡くなる人が大勢いたそうだ。太平洋の戦争で沖縄がその戦場となってすべてが破壊されたことを、資料館・記念館などで見たとき、私は、親や祖母が言った韓国戦争の後の時代のことを思い出した。私も戦争を直接経験したことはないが、（韓国の徴兵制によって）軍隊にいたとき、北朝鮮に近いところの島が北朝鮮に砲撃され、軍部隊や町の広場などが破壊された事件が起こってしまって、戦争寸前の状態にまでなったことがある。砲撃されたところが、私がいたところからわずか10kmしか離れていないところであったため、非常事態になって、昼夜関係なく海岸を見張る勤務をしたことがある。もともと怖がり屋である私だが、その時は本当に戦争が起こるかなと思って共にいた人たちと戦争が起こると我々は死ぬだろうと話したことがある。戦争についての間接経験をしたといえると思う。

戦争は平和を破壊する。そして戦争は、自分の居場所、自分の家族、自分のいるところや物事すべてを破壊してしまう。それで沖縄の戦争記念館やさまざまな資料館などが、戦争は絶対起こってはならないと、そして戦争は人間の残虐性の極みであると叫んでいる。徹底的に自分自身の利益のため、自分の身のため、沖縄を時間稼ぎの道具とした当時の軍部政権の仕業、そして韓国や中国、東南アジアなどで実行したことをそのままされると思って自殺の命令をし、自殺した日本軍。これを見て、「戦争は人間の仕業です」と強力に訴えた教皇ヨハネ・パウロ2世の言葉が浮かんでいる。

戦争の痕跡が示すその残虐さ、惨めさなどから私たちが本当に学ぶべきことは、戦争を起こす人間の心、考えであろう。なぜ太平洋戦争が起こったのか、太平洋戦争は誰が、何のために起こしたのかについて学ばなければならないだろう。沖縄の大多数の資料館・記念館には、これについての言及があまりないように見えた。

東アジアに平和を脅かす事件などがあり、戦争まで起こりかねない状況になりつつある現在、自分の国の安全や国の利益も大事かもしれないが、それより共同善のために、平和のために、ちょっとずつ譲り合う精神が現在必要ではないかと思う。自分の国や自分自身の利益のため、他の国を侵攻して植民地化し、大戦争を起こした過去の出来事を通して、生じた結果は私たちがよく知っている。自分の利益のためではなく、ちょっとずつ譲り合う精神が、戦争などの人間のすべてを破壊する出来事が起こらない方法ではないかと思う。譲り合う、他の言葉で言い換えると、イエス様がおっしゃった愛だと思う。

平和学習に行って平和と戦争について語ったが、戦争というとちょっと自分とは遠い感じがして、平和というのは、戦争や他の紛争の時だけ考えてしまう傾向があるかもしれない。しかし、平和というのは、普段の生活において実現しなければならないものであると思う。譲り合う精神、また他の人々を愛するイエス様の福音の精神に基づいて生きていくことこそ、平和を自分のものにしていくことができるのではないかと思う。

ローマ教皇庁福音宣教省長官

フィローニ枢機卿 司牧訪問のため来日

福音宣教省長官のフェルナンド・フィローニ枢機卿が9月17日（日）～26日（火）、日本司教団の招きを受けて司牧訪問のため来日。各地を訪れ、司教団、司祭、修道者、神学生・志願生、信徒らとの交流の時間をもった。長崎には19日に現地入り。11時30分、対話集会。午後、市内巡礼。17時45分、神学生・志願生との交流。19時、浦上教会でミサ。翌20日に離崎した。

写真は大司教館での対話集会。日本の教会がもつ福音宣教の使命を熱く語るフィローニ枢機卿。

互いの絆を深めて

新潟教区と上五島地区の青年が交流

8月30日（水）上五島の青方教会で新潟教区の青年5人と神学生1人、上五島地区の青年3人と横浜教区から飛び入りで1人が参加し、夕食を交えた交流会が行われた。

新潟教区青年会は、4泊5日の日程で、主に長崎市内と上五島を巡礼した。引率の伊藤幸史師（東京教区）の呼びかけにより、今回の交流会が催された。新潟教区と上五島地区の青年たちとは初対面だったが、皆同世代ということもあり、自己紹介の後は打ち解けた雰囲気で、終始和やかな会となった。

交流会の準備に携わった司祭は、「年々青年会活動が困難になっていく中にあって、青年たちは小教区や教区を越えて、全国的な広がりの中で活動し、互いの絆を深めている。今回の集まりはその意味で大きな収穫となったに違いない」と話していた。

次回、新潟での再会を約束し、お互いの友情を確かめ合いながら今回の集いを終えた。

子どもと女性の人権相談室

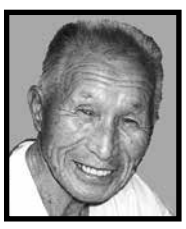
最初のご相談はお電話でお願いいたします。詳細は各小教区に配布されているポスターをご参照ください。

場所　カトリックセンター別館
連絡先　095-865-7829
時間　月～金　10時～16時
＊第3月曜日と休日（祝日・教区本部事務局休業日など）を除く

相談室室長　福田真理

フランシスコ 浦川行雄さん

（浦川 務師の父）



8月9日逝去。92歳。1925年7月15日、浦川菊松の次男として長崎に生まれ、20歳で終戦を迎え戦後を懸命に生きた。厳しさの中にも機知に富む性格で五男四女に恵まれ、司祭1人、修道女1人を育てた。

若い頃から苦労を厭わず、夕方になると地区の寄り合いなどに顔を出し、誰かの役に立つことを喜びとしていた。晩年は入退院を繰り返し、肺炎による呼吸不全により、被爆72年の夜に静かに召された。

葬儀ミサ・告別式は12日、浦川 務師（中町教会出身、福岡教区司祭）司式により中町教会で、親しい方々に見送られ執り行われた。

ビビアナ 友永ハナ修道女

（純心聖母会）

8月27日、同会のロザリオの聖母修道院（長崎市三ツ山町）で逝去。94歳。

1923年平戸市生まれ。39年入会、42年初誓願、52年終生誓願。会の創立草創期に苦労の多い生活を体験した。初誓願後は新しい修道院の先発として赴き、幼児教育や教会奉仕など第一線で活躍した。

亡くなる1週間前の8月20日に誓願宣立75周年のお祝いの喜びを共にしたばかりであった。たくさんの姉妹のお祈りの中で、静かに御父のみもとに帰った。

葬儀ミサ・告別式は28日、本部聖堂で行われた。

ミンダナオ内戦避難民支援報告

教区難民移住移動者委員会
三浦町教会信徒　伊達孝明

三浦町教会で行われている英語ミサ共同体のリーダー、アルフォンソ・ハイメさんが、出身地フィリピン・ミンダナオ島のマラウィ市で5月23日に蜂起したイスラム過激派と国軍による内戦の避難民を支援するため、8月13日～20日現地に行かれました。そこで、当委員会からも支援資金をハイメさんへ託しました。ここにハイメさんからの活動報告を紹介いたします。

避難民は、5月23日からイリガン市（マラウィ市からおよそ35㎞）の5カ所の避難所に1カ所あたり280人～1300人が避難しています。この避難所以外の方は、同市の親戚の家に避難しています。生活に必要な薬品・食料・掃除道具など、日本円で約13万円程度の物資を支援しました（物価の一般的な目安は日本の1／3）。今後の問題点として、公衆衛生、ストレス・心配、病気、安全、ボランティア・スタッフの確保、その他があげられます。

避難者はマラウィ市に帰りたいと考えていますが、自分たちの家は壊されています。いつ帰れるか、いつ内戦が終わるか分からないと言っていました。また、援助物資をもらって、幸せと言われていました。特に糖尿病の患者さんは「薬をもらってとても嬉しかった。ありがとうございます」と直接言われました。お母さんたちも赤ちゃんのオムツをもらって、感謝しています。お母さんたちの笑顔をみて、私（ハイメ）は幸せでした。避難者たちは食べ物の他に、せっけん、清掃用具、その他の物も感謝しています。

避難所を訪問するハイメさん（中央）

避難者たちは、三浦町教会の英語ミサ共同体の皆様に〝ありがとうございます〟と伝えてほしいということでした。直接避難所に行ったのは、とても良い経験でした。子どもたちと話したり、遊んだりして、とても楽しかったです。避難所でも子どもたちは笑ったり、勉強したりしています。

避難者は行くところがありません。私たちが歩み寄ることで、彼らは愛を感じることができます。私は避難者に人間だけではなく、神様の姿を見ました。避難者からも愛をもらいました。本当に兄弟たちです。

「世界難民移住移動者の日」は日本では9月第4日曜日（今年は9月24日）に定められており、この日にあたって、教皇フランシスコは全世界にメッセージを発信しています。その中で特に、「子どもの移住者の現実に目を向けるよう」呼び掛けています。

みことばにふれて 141

平野 哲也 神父（城山教会）

２０１３年、日本の誇る富士山が世界文化遺産に登録された。その後、さらに多くの登山客が富士山を訪れているという。とても喜ばしい話ではあるが、最近、次のようなニュースを耳にした。富士山の静岡県側にある須走（すばしり）口の本7合目付近に落書きが見つかった。それも正しい登山道とは全く別の方向を示す矢印で、その方向は足場が悪く、滑落の恐れもあるということだ。現場付近の山小屋の男性が、山小屋の下見に来た時に、３００メートルにわたって、岩などに白いペンキで書かれた矢印を42カ所も発見した。実際、落書きに従って、迷ってしまった登山者も出ているという。登山者には多国の人や高齢者や子どももいるため、身勝手な行動で、登山者を危険にさらしていることに山小屋の住人たちは強い怒りを感じている。

とても迷惑な話である。偽りの矢印に導かれ、登山者が遭難でもしたら大変である。安心、安全に登山を楽しむためには、しっかりとした正しい道標（みちしるべ）か、確実に山頂まで案内してくれる道案内人が必要である。そうでなければ道に迷い、滑落、遭難など、命の危険性が常にあって、心配と不安の中で登山を続けなければならない。また、山頂に到達して、美しいご来光を目にすることもできないかもしれない。自分の歩いている道が、どこへ繋がっているのか、全く先が見えず、分からないということはとても恐ろしいことだ。

ある新聞の中に、『おしえてほしい。だって　何も見えない。何も分からない。この闇の中で　何を求めて生きればいいのか』（静岡・中3 女子）という記事を見つけた。人生の旅路で、何の道標も見えず、どこへ向かっているのか分からず、何を求めながら生きればいいのか、現代社会を迷いながら、不安の内に生きる少女の悲痛な心の叫び声が聞こえてくる。世界が混迷し、社会の闇が深くなればなるほど、偽りのない人生の道標、私たちを善い道へ導いてくれる道案内人が必要である。

そんな中、『わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ』（ヨハネ8・12）と呼びかけてくださる『道』そのものである主イエスに出会い、その方を知る恵みをいただいた私たちは何と幸いな者だろうか！

人

〝言葉は心を伝える道具〟

フリーアナウンサー　東島真奈美さん

アナウンサーの仕事に就いて36年。現在はフリーで活動し、朗読・話し方教室や各種研修の指導、行事の司会など、教会内外で活躍する。

「お告げのマリア修道会から、志願生の皆さんに話し方教室をと声を掛けていただき、最初にうかがったときは、みんなが妹に見えました」

「シスターになりたい」と夢を抱いていた妹さんは、東島さんが大学生のとき、12歳で亡くなった。家族の死によって命のこと、生きる意味を考えた。大学卒業後、長崎のテレビ局（KTN）に就職。「私には（修道者としての）召命の導きはなかったけれども、『伝える』という仕事に入って、そこで積み重ねたものを子どもたちに伝えることになった。私にとってはこの道、すべてつながってきたなあっていう思いはあります」

志願生、小神学生との関わりは25年を越え、「神父様になられたり、シスターになられたりでうれしい」と笑みがこぼれる。

8月9日の平和祈願祭では毎年、司会を務める。昨年から祈願祭は、子どもたちの参加を意識した典礼となった。「世界は大事なこと。私も小さい頃から、被爆した父母から生の声で話を聞き、怖かったけれども心に残っていった。戦争体験者じゃない私も、気がついたら何かしらバトンを受け取っていた。子どもたちが関わり、聞くことで、その言葉は子どもたちの心の中に残ってくれるのでは」と語る。

「平和祈願祭のアナウンス、10年目を迎えた（平和を祈る）音楽朗読会、学校を訪問しての平和朗読、すべて私は祈りとしてささげています。事前に練習を重ね、ミサ中、本番中は『私を道具にしてください』と小さな祈りを心の中で唱え、マイクに向かっています」

伝えるためには、自分の中にしっかりとした〝着地点〟を持つことが大切だと考える。

「揺るがない着地点は祈りの中にあると感じています。言葉は心を伝える道具、相手を理解するための道具。時には傷つける道具となることも…伝えるって難しい。これは大きなテーマで、これからも問いかけていくのだと思います」

やさしく美しい声。「言葉に誠実に」向き合う姿こそ、誠実そのものだ。教区・地区・小教区で朗読研修会を行うこともあり、かつての教え子から声が掛かると、「力になれるのだったら」と駆けつける。感謝の気持ちを携えながら、「日々の小さな出来事を通して感性を育み、言葉を紡いでいきたい」と願っている。

長女・衣里さんも同じアナウンサー（ニッポン放送）の道で活躍中。城山教会所属。58歳。

待ちに待った新聖堂

稲佐教会祝福ミサ

9月10日（日）改修工事により生まれ変わった稲佐教会（下山盛朗主任司祭）において、髙見三明大司教様司式による祝福ミサが行われました。

白を基調とする明るい聖堂。晴天の光を受けて美しく輝く三面のステンドグラス。8カ月待ちに待った新しい聖堂でのミサは、信徒の喜び、感動でいっぱいになりました。

「教会を何とかしなければ」との信徒の思いが一つになって、このたびやっと念願の改修工事完成の日を迎えることができました。この日まで、私たちの心を力強く導いてくださった神様の深いお恵みに感謝しています。今後はこの教会を中心に、信徒の交わり、一致を何よりも大切にして、今まで以上に、豊かな信仰生活を実践していきたいと思います。

ミサ後行われた祝賀会には多くの信徒が集まり、教会の完成を喜び合い、そして今後とも稲佐教会をさらに盛り上げていくことを誓い合いました。喜びの一日でした。

稲佐小教区評議会議長　岩村正晴

子どもと大人共に学ぶ

家庭をテーマに研修会（長崎北地区）

8月27日（日）カトリックセンターで、長崎北地区評議会と同地区家庭委員会が共催し、家庭をテーマにした研修会を開催した。今回の研修会は、北地区家庭委員会のシリーズ「秘跡といのちの学び」の内容を取り上げた企画で、評議会との共催は初めて。参加者は小学校4年生から高校生、保護者や信徒ら計約160人だった。

近年、子どもたちの夏休みが終わり2学期が始まってすぐに、いじめ、自殺、不登校、中高生の不純交際などが全国的に問題となっている。子どもたちは、秘跡の恵みを通して神様の子どもとして生活していくことを目指し、保護者と一緒に、愛宕教会主任の井田明師による講演『生きることは神に向かって歩くことです』を聞いた。その後、グループに分かれて子どもたち同士で話し合いをし、その間、大人に向けては、北地区長の山脇 守師による「教区シノドスの提言推進について」の講演があった。

最後に、話し合った内容を子どもたちが発表し、その内容に、参加した大人たちは子どもたちの成長を感じている様子だった。全員にとって有意義な研修会となった。

主の平安
カトリック式葬祭・飾付一式
（有）栄光式典社
代表取締役　ヨハネ　西村 勇二
長崎市辻町7-18　TEL(095)844-4011
24時間営業　FAX(095)843-9896

ハマチ・タイ養殖、アジ・イワシ加工、中型旋網
エテルナ・ワコー（株）
代表取締役　ミカエル　溝口 晃
〒858-0926　佐世保市大潟町586
TEL(0956)47-4380

主の平安
株式会社 五島式典社（斎場）五島中央会館　奈留会館
代表取締役　ヨゼフ　浦　昭
24時間営業
五島市上大津町1385番地1　TEL (0959) 74－5551　FAX (0959) 74－5552
五島市奈留町浦1899－1　TEL (0959) 64－3101　FAX (0959) 64－3102